

バイオテクノロジー標準化支援協会ジャーナル No.164

SABS Journal No. 164

発行日：2026年1月9日

URL：[バイオテクノロジー標準化支援協会ジャーナル \(sabsnpa.org\)](http://sabsnpa.org)

新年おめでとうございます。年末から厳寒が続く中、サザンカ、菊、そして冬バラは例年通り咲いていますが、皆さまはお元気でしょうか。本年も宜しくお願い致します。

今年の年明けはとんでもないニュースで始まりました。ベネズエラ事変です。同じ1月1日といえど2年前の能登半島地震がありますがこれは自然災害でしかも予知できない事象ですが、戦争は100%の人災です。何年も前から準備していたというのですからあの大統領は遂に本性を現したのでしょうか。ノーベル平和賞を公然と欲しがっていた人物でした。前号で、昨年のノーベル平和賞がマチャド女史に授与されたことを紹介しました。ベネズエラで反独裁の社会運動をしていて逮捕状が出ていた人です。このところ世界に次々に‘発生’している独裁者たちは、殆ど民主的に選ばれた元首です。しかしやがて任期の終りが近づいて来るとこれを延ばし遂には憲法を改悪して独裁者になるのです。ベネズエラでは今世紀初めの25年位前から続く「人民主義」独裁政権の2代目として民主的ではない選挙で出てきた大統領が拉致されたのです。今回の脱出劇を演出したのは何と自分も独裁者に成りたがっているあの大民主国の大統領でした。国際法違反で戦争犯罪であると多くの国が安保理で主張しました。一方、ウクライナも中東も相変わらず戦争が終わる兆しが全く見えず多数の死傷者が毎日出ています。

東京都心では元日は晴れていたのですが翌2日の夕方から気温が下がり雪が降り始めました。筆者の住む都心では数時間で止んだのですが、気温は零下のまま、僅かに積もった雪は日陰では数日間残っていました。雪国の方々は久しぶりの大雪で大変です。自動車製造の技術が進みましたが、最近の車は、スピードだの加速性能だのが重視され過ぎている気がします。そのためか、この冬、雪道で多重衝突が頻発しています。大雪が毎年だった頃、雪国では、車高が高く4輪駆動にスノータイアの車で雪道に慣れた運転手が主流だったので、こんな事故は余りなかったと記憶しています。一方、雨が少ない地方では、異常乾燥で火事が増えています。相変わらず焚火で始まることが多い山火事も頻発しています。過疎でマキやワラビ・キノコ取りなどで集落の人たちが出入りしていた林が手入れされなくなって久しく、今やクマ・イノシシなどの野生動物の住かになり、また枯れ木や落ち葉が積もり雨が少なく乾燥していて火事になると地面の深いところまで燃え広がりが消火が非常に困難になるという大変危険な状態です。

話題は変わり、七草粥の話です。この風習は幕末の江戸で始まったという記事をどこかで読みました。それによると当時までに平和が続いていた江戸では、美味なご馳走が溢れ昔の粗末な食事が

忘れられかけていたのを憂いた道学者がご馳走続きの正月早々貧しかった昔の生活を思い出して気を引き締めるように提案したという話です。毎度取り上げる Pax Yedo でした。

バイオに移ります。ウイルスによる癌治療の話題です。

https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imsut/jp/about/press/page_00346.html 「信州大学医学部附属病院皮膚科奥山隆平教授と東京大学医科学研究所 附属先端医療研究センター 先端がん治療分野 (同研究所附属病院 脳腫瘍外科) 藤堂具紀教授らの研究グループは、抗がん免疫を引き起こす能力を強化した機能付加型の第三世代のがん治療用ヘルペスウイルスを用いた悪性黒色腫の医師主導治験において、中間解析の結果、この人工ウイルス (T-hIL12) の高い治療効果を確認しました。治療効果の検討を目的とした第 II 相臨床試験 (注 1) で、切除不能又は転移性悪性黒色腫の未治療患者に対し、4 回の腫瘍内投与を行ったところ、ウイルス投与後 24 週経過した 9 例において、主要評価項目である奏効率 (がんが消失あるいは縮小した患者の割合) が 77.8% (7/9) であり、対照となる標準治療の奏効率 (34.8%) と比較して極めて高い有効性を示しました。一方、T-hIL12 投与後に生じた副作用のうち最も頻度が高かったのは一時的な発熱と一時的なリンパ球数減少で、第 I 相臨床試験で示されていた高い安全性が再確認されました。ウイルス療法は、がん細胞に感染させたウイルスが増えることによって直接がん細胞を破壊する手法で、革新的ながん治療法として期待されます。T-hIL12 は悪性神経膠腫 (脳腫瘍) を適応症として 2021 年に国内で市販が開始された G47Δ に免疫刺激機能を付加した新型ウイルスで、その開発は、発明から医師主導治験に至るまで、研究者だけで推し進めてきました。本治験の有効性が確実となったことを受けて、悪性黒色腫を適応症とした T-hIL12 の製造販売承認申請 (注 2) の実現性は非常に高く、今後治験を加速させます。日本のウイルス療法の開発技術は世界をリードしており、T-hIL12 が承認されれば、世界初の機能付加型の第三世代がん治療用ヘルペスウイルス薬となる見込みです」という発表です。問題は 5 年かかるというこのあとの臨床試験です。これは製薬会社が自費で行うためこれを引き受ける国内の会社があるかどうか。ぜひ国費を投じて欲しいと研究者が切望しているのですが。

ここ何回か続けて取り上げた熊の話題ですが、最近では報道がめっきり減ったようです。例年、秋の終わりころには冬眠に入っていたクマですが、ここ数年異常気象のため冬眠が遅れ、都会に住みついてしまったクマが過疎化で増えた空き家で冬眠するらしく、人身事故が減ったのでしょうか。大体クマの冬眠は本当にグッスリ眠ってしまうリス類やネズミ類の冬眠と違い実は「冬ごもり」なので <https://bearpark.jp/lecture/2388/> ただヒトなどの冬籠りと違い体温を下げ、代謝を低くして、餌なしで眠るのです。冬眠と似ていますが、時々目を覚まし、なんとメスは妊娠出産までします。因みにヒトでも「低体温療法」といって心肺停止の患者の脳機能を守るため使われています: [低体温療法とは | メディカルノート](#)

前回の定例会では、様々な話題が出ました。生成 AI から音楽、芸術、哲学的なお話など実に多彩で、大いに盛り上がりました。さらに北海道出身の田坂勝芳理事がご自身のヒグマ出会いの経験などを交えたお話を披露されました。そこでぜひ次回にはクマの話をしてくださいとお願いした次第です。田坂さんはトマトなど農産物でも有名な沼田町 <https://www.town.numata.hokkaido.jp/> の出身で北大工学部卒業、通産省(当時)に入省、バイオ関係の仕事をされていて「標準化」のことなど奥山典生先生とは古くからの関係です。退官後百名山征服を志し、完遂の最後に北海道日高山脈の山々に挑みました。この辺はヒグマの「巣窟」として有名な処です。という事で乞御期待！

さて次回は例年通り新年会です。話題はまずクマの話を田坂さんをお願いしています。松本邦男さんにも最近の話題をお願いしています。その他ご出席の方々には近況報告を含めて話題を提供して頂きます。奮ってご参加をお待ちしています。

バイオテクノロジー標準化支援協会（SABS）第 135 回 定例会のお知らせ

日時： 2025 年 1 月 17 日(土) 13 時～17 時

場所： 八雲クラブ(東京都立大学同窓会) 渋谷区宇田川町 12-3 ニュー渋谷コーポラス 10 階

話題： クマのはなし、その他出席者による話題提供と新年会

演者： 田坂氏松本氏他出席者

定例会会場**八雲クラブ**への道順：

渋谷駅ハチ公脇の大交差点を渡り、井の頭通りの坂道の右側を東急ハンズの看板を目指して登り、ハンズの手前で右手の急坂に入る。坂の途中で新しい PARCO ビルを右に見ながら T 字路を左に曲がり坂道を登り切った所で左側に建つマンションがニュー渋谷コーポラスです。入口の短い階段を降りるとエレベーターがあります。10 階で降りると直ぐ左隣の部屋が**八雲クラブ**です。

定例会は、原則として毎月第 4 土曜日に開催しています。7 月と 8 月、そして 11 月は休みで 12 月の会は原則としては第 1 土曜日です。なお八雲クラブで他の催しの割り込みがあって予定通り予約が取れない場合は第 4 土曜ではなく他の土曜となることがあります。2026 年は、次回 1 月 17 日、そして 2 月 21 日、3 月 21 日に会場を既に予約済みです。

バイオテクノロジー標準化支援協会(SABS)は、故奥山典生先生(東京都立大学名誉教授)によって 2007 年に創立され、SABS ジャーナル第 1 号はその年の 10 月 11 日に発行されました [バイオテクノロジー標準化支援協会ジャーナル \(sabsnpa.org\)](https://sabsnpa.org/) 以来、奥山先生は 2015 年の第 73 号(5 月 17 日発行)まで執筆されて居られました。先生はそのわずか 2 日後の 5 月 19 日、訪問先で倒れられ、救急搬送入院、療養されて居られましたが、6 月 13 日に逝去されてしまいました。混乱の中、当時の理事たちで今後について話し合った結果、その年の 6 月 19 日には何とかジ

ジャーナル第 74 号をまとめることが出来ました。以後、本ジャーナルは引き続き定期的に発行され、今回は第 162 号となります。SABS ジャーナルでは、奥山先生が様々な分野にわたる蘊蓄を毎号ご披露されて居られました。先生には全く及ぶべくもありませんが、現在は蘊蓄もどきの話題を筆者（檜山哲夫）が書いています。ぜひ読者の皆様からのご投稿をお待ちしています
thiyama@athena.ocn.ne.jp。

当協会のもう一つの大きなプロジェクトは学術雑誌「医学と生物学」の発行です。免疫学者緒方富雄博士が 1942 年に創刊した総合学術雑誌で戦後も継続発行されていましたが、2013 年に休刊となりました。それ以来、奥山先生はこの雑誌の復刊に努力されて居られました。しかし残念ながらご存命中には実現は出来ませんでした。我々後継者は川崎博史理事を中心に努力し 2018 年にインターネットジャーナルとして復刊することが出来ました。下記ウェブで御覧になれます：

<https://medbiol.sabsnpa.org/EJ3/index.php/MedBiol/issue/view/52>

最新号は昨年 11 月 17 日発行の **165** (No4) です：

<https://medbiol.sabsnpa.org/EJ3/index.php/MedBiol/issue/view/58>

創刊号からの内容は下記ウェブで表紙をクリックして内容の閲覧が出来ます：

<https://medbiol.sabsnpa.org/EJ3/index.php/MedBiol/issue/archive>

「医学と生物学」はオリジナルの研究報告論文の他、総説、解説、エッセイなども掲載しています。ぜひ皆様からのご投稿をお待ちしています。

この SABS ジャーナルは、バイオテクノロジー標準化支援協会 (SABS) 会員だけではなく、広い意味でのバイオテクノロジー関係の方々に配信しています。現在、このジャーナルを読んで下さる方々は 600 名近く居られます。多くの方が奥山先生の関係で、先生の広がった人脈に改めて驚いています。ぜひ読者の方々からも話題提供をして下さる方をお待ちしています。当 SABS ジャーナルのホームページ https://sabs.sabsnpa.org/sabs_j/ ではジャーナルの最新号を含めたバックナンバーが収録してあります。またお知り合いの方でこのジャーナルを配信ご希望の方が居られましたら会員である必要はありませんので筆者のアドレス thiyama@athena.ocn.ne.jp に直接お知らせください。また配信停止、新規会員登録、アドレス等の登録情報変更等のご希望やウェブサイトに関するご意見もメールでお寄せください。

特定非営利活動法人バイオテクノロジー標準化支援協会

NPO Supporting Association for Biotechnology Standardization (SABS)

URL: <http://sabsnpa.org>

理事: 荒尾進介、小林英三郎、田坂勝芳、松坂菊生、小川哲朗、川崎博史、田中雅樹、檜山哲夫
監事: 堀江 肇